



筑摩世界文學大系

63

ホーフマンスタール ロー

大山定一 松本道介
津川良太 川村二郎
中野孝次 富士川英郎 訳
柏原兵三



アンドレアス バッソンピエール元帥の回想記から
六百七十二夜の物語 騎兵の物語
イエーダーマン チャンドス卿の手紙
小説と戯曲における性格について 帰国者の手紙
ラデツキー行進曲

筑摩書房

筑摩世界文學大系 63

昭和四十九年十一月十五日 初版第一刷発行
昭和五十三年一月三十日 初版第三刷発行

ホーフマンスタール ロート

訳者代表

発行者

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八

大山定一
川村兵三
柏原猛
岡山

筑摩書房

郵便番号一〇一―九一

電話東京(二九)七六五一

振替口座東京六一四一二三

印刷 三晃印刷 製本 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類) 0397 (製品) 20663 (出版社) 4604

Printed in Japan

目次

ホーフマンスタール

アンドレアス（遺稿）

大山定一訳 5

Nのヴェニス滞在日記——創作ノートの一——

46

Nのヴェニスの体験——創作ノートの二——

47

小犬をつれた貴婦人——創作ノートの三——

61

『アンドレアス』後語（ワッサーマン）

77

バツソンピエール元帥の回想記から

大山定一訳 81

六百七十二夜の物語

大山定一訳 88

騎兵の物語

松本道介訳 98

イエーダーマン

津川良太訳 104

チャンドス卿の手紙

川村二郎訳 133

小説と戯曲における性格について

中野孝次訳 141

詩についての対話

帰国者の手紙

ロート

ラデツキー行進曲

ホーフマンスタールの変容

ヨーゼフ・ロート

解説 (ホーフマンスタール)

(ロート)

年譜

富士川英郎訳

150

中野孝次訳

159

柏原兵三訳

179

R・アレグ
松本道介訳

383

F・ブ
池内紀訳

395

川村二郎

401

柏原兵三

406

411

ホー
フ
マ
ン
ス
タ
ー
ル

アンドレアス

——あるいは融和合一の人々——

わたしたちのなかには
魔法つかいの男と女がいる。
しかし、それはたれも知らない。
アリオスト

奇妙な女友達

——小犬をつれた貴婦人——

「もう、これでいい」と、わかいアンドレアス・フォン・フェルシエンゲルダーは心のなかつぶやいた。一七七八年九月十七日、いま解の船頭は、彼の荷物を石垣の階段において、ふたたび棹を押した。「ぼつんと、いきなりこんなところへ放りだされたが、まあ、これでいいんだ。ぼくはヴェニスに馬車のないことは知っている。荷物持ちだって、ここでは狐どもが見つけるわけにはゆくまい。まるで狐どもが『こんばんは』とでもいいそうな、ひどく寂しい場所だ。ウィーンの市の東西もわからぬ人間が、夜あけの六時、いきなり駅馬車からロサウエル

レンデかワイスゲルベルンへひとり足をおろしたみた。とにかく、ぼくはイタリア語を知っている。だが、それが何の役にたつだろう。たとえどんな者に思われても、そのままぼくはほっておくより仕方がないのだ。あの家のなかで眠っているあかの他人に、何といつて言葉をかけたらいいのかしら？ そと戸をたたいて『もし、もし、ちょっと……』と声をかける——」とても彼は、そんな勇氣はなかった。と、誰かの足音が聞えてきた。静かな朝の空気のかを、敷石をふむ、冴えた、はっきりした靴音だった。それは近づくのに、なかなか時間がなかった。しばらくして、ふと横町から、仮装舞踏のマスクをした紳士が、すがたをあらわした。彼は寒むそうに、両手でマントをおさえ、身体をつつむようにして、広場をよこぎろうとした。アンドレアスはいそいで一歩、前にでて、挨拶をした。紳士は帽子をとった。すると帽子といつしよに、帽子にぬいつけた仮面がとれた。十分信用のおけそうな人物だった。動作や態度から、一目で身分のある紳士であることがわかった。アンドレアスは大いそぎで用事をすませた。と思った。朝がえりの人を、こんな時間になく引きとめるのは、ぶしつけにちがいない。彼は早口にいった。自分が外国人であること、たったいま、この島へ渡ったばかりであること、ウィーンからウィラハ、ゲルツを通して、やって来たこと。そして、すぐつまらぬ説明をしたのに気がついて、当惑した。アンドレアスのし

やべるイタリア語がもつた。だした。

相手の紳士は丁重な身ぶりで近づいてきて、やさしく「御遠慮なく、どうぞ……」といった。そういつたとき、マントの前がひらいた。不思議なことに、マントの下はワイシャツ一枚のを、アンドレアスは見てしまった。それに、靴には締め金がなく、ずり落ちた靴下からなかばふくらはぎが出ていた。彼はいそいで紳士にいった、朝風がつめたいのにお引きとめするのは、まことに失礼です。どうぞ、お帰りくださるよう。わたしは誰かをつかまえて、宿屋か貸間のようなものを教えてもらえばいいのです——という意味のことを。仮面の紳士はふたたびマントを身体にまきつけるようにして、べつに急いではいないと答えた。アンドレアスは、相手の異様なワイシャツすがたを見たことを、すでにさとられてしまったと思うと、すっかり度を失った。なぜ朝風がつかみたいなど口走ってしまったのだろう。彼はますます当惑して、身体があつくなつた。彼は無意識に自分も旅行用マントの前をひらいた。しかし、見知らぬ紳士は丁寧な言葉でいった。マリア・テレジア女王のお国のかたに、何かの御用に立てば光栄です。オーストリアの貴族には二三の親密な知人もあることだし、いや、光栄というよりも、わたしの大きなよろこびです。そして彼は、オーストリア近衛師団の連隊長ライシヤハ男爵や、エステルハツィ伯爵の名前をつげた。これらの名家の名前を深い親しみをもって発音するのが、い

つそうアンドレアスに大きな信頼感をあたえた。彼はウィーンの小貴族の青年だった。これらの名家の人々は、ふだん名前をきいて知っているが、ただ遠くからその姿をみて知っているのにすぎなかった。

仮面の紳士は、それなら造作はない、すぐ近くにお望みの家がある、といった。アンドレアスはもはや断わるにも、ことわるべき言葉がなかった。連れだっていっしょにあるきながら、このあたりはヴェニスのごでしようとして、なにげなく聞いてみた。サン・サミュエルという返事だった。そして、案内されてゆくのは旧家の伯爵の家であること、最近、その長女が家を出たから、彼女の部屋がたまたま空いていることなどがわかった。二人はせまい横町にはいつてひと構えの高い家のまえに着いた。なるほど、古い貴族の邸宅にちがいない。しかし、荒れ放題にあられているらしく、窓という窓がガラスのかわりに板を打ちつけてあった。紳士は門をたたいて、いくつもの名前を大ごえで呼んだ。高い窓の一つが開いて、中年の女の顔のぞいた。用むきをたずね、急に早口で二人の相談がはじまった。紳士はアンドレアスに告げた。――伯爵はもう外出してしまったこと。台所の必要なものをととのえるのに、いつも早朝に出かけるのが、伯爵の日課であること。しかし、とにかく、夫人は在宅であるし、部屋を借りる交渉は何の支障もないこと。河岸においた荷物を取りに、さっそく誰か人をやるように決めたこと……

玄関のかぎがはずされた。二人は洗濯ものをはした、せまい中庭をとり、雨ざらしの急な石の階段をあがった。階段の石は磨滅して、皿のようにくぼんでいた。この家はアンドレアスの氣にいらなかった。主人の伯爵が早朝から食料が何かを買い出しに出かけたというのも、わけがわからなかった。しかし、案内者がライシヤハやエステルハツィなどと親交を持つ紳士だというのに、何かしら一抹の明るい安心があった。みじめな悲しい気持は、みじんもなかった。階段をあがると、やや広い部屋があった。一方の隅にかまどがあり、それと反対の側に仕切りをした納戸があった。一つだけある窓のそばに、低い椅子をおいて、十五六歳の少女が腰をかけていた。すでに若くはないが、非常にうつくしい夫人が、少女のみごとな髪を、高い塔のような形のシニオン（まげ）にゆいあげるところだった。アンドレアスと紳士が部屋にはいつて帽子をとると、少女は声をあげて隣室へ逃げ去った。アンドレアスは、印象的な、眉の濃い、うつくしい横顔を、ちらと見たと思った。紳士は伯爵夫人にむかって「いとこ」と呼びかけた。そして、あたらしい若い友人を紹介した。話は手間どらなかった。夫人が部屋の代金をいった。アンドレアスは簡単に承諾した。彼はまず何よりも、部屋が横町に面しているか、それとも中庭に面しているかを、知りたかった。中庭にむいた暗い部屋で、せっかくヴェニスに

来ながら、毎日をすごすのはつまらなかった。旧市内か、それとも市はずれか、それも知りたかった。しかしアンドレアスには、そんな質問をもちだす暇もなかった。紳士と伯爵夫人はいつまでも話をやめなかった。と、さっきの少女が、ドアをゆすぶって、「ツォルツイをベッドから出さなければいけないわ」と、部屋越しにさげんだ。「胃癒撃で、階上の部屋で寝ているのよ」「では、ごいっしょに、すぐお上がりくださいまし」と、伯爵夫人がいった。「あの役立たずは、家の子どもたちに言いつけて、さっそく出してしましましょう。ついでに、あの男の手で、お客さまのお荷物も運ばせることにしますから」夫人は自分が案内をしないで、いとこの紳士に万事をまかせる失礼をわびた。「ツスティナの支度に見がまわるほど忙しいものですから。ちょっと手をはなすこともできませんわ。ええ、例の富籤の件で、今日はむすめをつれて訪問に出かけることになっていますの。午前も午後も、ぜんぶつぶして、会員のかたを一人一人おたずねしなければならぬのですわ」

アンドレアスは、会員だの、富籤だのというのが、一体何のことか、不審におもった。しかし、紳士がしきりにうなずいて、無造作に諒解をあたえるのを見ると、やはりまた質問の機会を返りにがしてしまった。アンドレアスは紳士といっしょに、ようやく青年期にはいるという年ごろの二人の少年のあとについて、急な木の階

段を三階の部屋へ昇つていった。二人の少年は、たぶん双生児らしかった。

ドアのままで少年たちは足をとめた。部屋のなかからは、低いうめき声がきこえてきた。少年はすばやく栗鼠のような目を見あわせて、甚だ満足そうな顔つきをした。ベッドのカーテンを開けはなしたまま、蒼白い青年が寝ていた。

壁ぎわの机と椅子の上には、よごれた画筆や絵具つぼがのせてあった。そして、パレットが壁にかかっていた。きれいな、澄みきった鏡が、反対側の壁に光っていた。そのほか部屋には何もない。明るい気持のいい部屋だった。二人の少年が同時にいった。「もう気分はいいかね？」青年は呻くような声で返事をした。「すこしはしました」——「石を取ってもいいね？」

——「うん、そうしてもらおうか」——「胃が痛むときは、胸の上に重石をおくんですよ。すると、よくなるっていうんです」少年の一人がそう説明した。もう一人は、さっそく石を動かしかかった。二人の少年が力をあわせて、やっと持ちあげられるほどの重い石だった。

アンドレアスは自分のために病気の青年を追いつけるのだと思うと、いやな気持がした。彼は窓辺へいって、なかば立てかけたよろい扉をすっきり開け放った。すぐ下は運河だった。むかしの大きな建物の大理石の階段に、きらきら光った小波がくだけていた。そして、一方の外壁に、水の反射のかげろが動いた。彼は半身を乗りだした。両側の家が一つ一つ重なるように

つづき、横町はひろびろとした運河の水とまじわっていた。朝の太陽がまともに水を照らした。街角の家のバルコニーが突き出していた。鉢植えの夾竹桃が風に枝をゆすぶられていた。風を受けた家々の窓からは、毛布や絨緞が干してあった。運河の対岸には壁龕にみごとな石の彫像のならんだ宮殿風の建物がみえた。

彼は部屋へ引きかえした。仮面の紳士はすでに姿をけしていた。青年が部屋のまんなか立って、ただ一つしかない机と椅子から、絵具つぼや画筆の束を片づける少年たちを指図していた。青年の顔は蒼白だった。ちょっと不良じみた感じの美青年だった。べつに気味わるさは感じなかったが、下唇の一方がななめにさがっていて、いささか意地わるそうな印象を残した。

彼はアンドレアスにいった。「さっきの紳士が、マントの下に何も着ていなかったのを、お気づきですね。靴の締め金も切りとってありました。毎月一度は、きつとあんなことがありますよ。たぶん、大体のことは御想像がおつきでしょう。彼はトランプ遊びにまったく目がななのです。

昨日の彼のすがたを一目ごらんに入れておきたかったですね。ぜいたくな刺繍の上着。花をつけたチョッキ。メダルをぶらさげた時計が、いつも二個。タバコのケース。五本の指にはめた、それぞれの指輪。銀のみごとな靴の締め金。一分のすぎもない立派な紳士です」彼は声をだして笑った。しかし、そのわいら顔はあまり好感をあたえなかった。「この部屋はいい部屋です

よ。ほかに御用があれば、何でもばくが承りましよう。まず気のおけないコーヒー店を御紹介しなければなりませんね。すぐこの近くです。一度ばくが御案内しておけば、気持よくサーヴィスをしてくれますよ。どうぞ、御安心ください。そこで手紙を書こうと、誰かを待ち合わせる約束をしよう、何にでも御利用ができませんからね。そつと秘密の部屋ですることできえなければ、どんなことに使ってもかまいません」彼はふたたび笑った。少年たちはこのあまり上等でないウィットを聞いて、おもしろそうに大声でいっしょに笑った。二人は力をあわせて、重い石を部屋から押し出そうとしていた。二人の少年の顔は階下のうつくしいむすめの顔に似ていると、アンドレアスは思った。

「もしあなたに、信用のおける、まぢがいのない人間を、ぜひとも必要とするような用事があればですよ」と、画家は言葉をつづけた。「何をとおいても、まずばくにおまかせください。万一、ばくがお傍にいないときは、ちょっとフリアウル人をたのめば、よろしいのです。リアルトの橋のたもとだろつと、どこの広場だろつと、造作なく見つかりますよ。ヴェニスで安心のできる走り使いといえは、彼らだけでよし、一風変った百姓すがたで、すぐに一目でわかりますからね。実に口のかたい信頼すべき人間です。一度なじみになっただけで、お名前は決して忘れません。仮面をつけていても、歩きつきや靴の締め金で、確実に、まぢがいのなく覚えていま

す。それから、もう一つ。もしあの家に何か御用があれば、これも御遠慮なく申しつけてください。ぼくはあすこの画家でよし、自由に出入りができるのです」

アンドレアスには、対岸の宮殿風な大きな建物のことをいつているのが、すぐわかった。普通の住宅には大きすぎるし、宮殿の一つにしてはいささか薄よれがしている、と彼は思っていた。玄関からはただちに大理石の階段が運河の水におりていた。「そら、この真むかいの灰色の建物ですよ。サン・サミュエル劇場といいますがね。まだ御存じではなかったのですか。われわれはみんなあすこで働いています。ぼくはさきほど申したように、背景画家ですし、舞台の照明や花火も受け持っています。この奥方は数案内人、主人はランブミがきです」

「え、誰がですって？」——「あなたが厄介になろうというブランペロ伯爵のことですよ、もちろん……最初は、むすめさんが女優になりました。それがつぎつぎに、みんなを連れていったというわけです——いいえ、あなたがさっきお会いになったむすめさんではない——姉の方の、ニーナという子ですがね。ニーナは誰だつて一肌ぬいでみたくなる、いいむすめさんですよ。午後、さっそくニーナの家へ御案内しましょう。下の子も謝肉祭から出るようになっています。とにかく、少年たちが急いでいるようだから、あなたのお荷物を取りに、ぼくは出かけます」

アンドレアスはひとり部屋に残された。彼は窓のよい扉を引いて、かぎをかけた。一つの扉のかぎが壊れていた。すぐ直さすようにいわねばならぬと思った。彼は絵具つばや小箱などの散らかったのを戸口に出した。ベッドの下からぼろ布をひろい、机のよれを拭いた。絵具のしみがとれて、きれいに光った。彼はぼろ布を隠すために部屋の隅をさがした。ふと掃がみをつかった。彼は箒で部屋を掃いた。掃除がすっかり終ると、彼はきれいな小鏡をまっすぐに立てておした。ベッドのカーテンを締めた。そして、窓の方へひいて、ベッドのすその椅子に腰をおろした。そよそよと風が彼のわかい額を吹いた。ほのかな海藻のにおいを持つてくる潮風だった。

彼はウィーンの両親と、コーヒー店で書く両親宛ての手紙のことを考えた。とりあえず、こう書き出そうと思った。「御両親さま、無事ヴェニスに着いたことをお知らせします。わたしは偶然、ある貴族の家庭の、居心地のいい、風のよく通る、小ざっぱりした部屋に住むことになりました。わたしの部屋は横町に面しています。しかし、窓の下は地面ではなくて運河の水です。人々はゴンドラに乗って往き来します。一般の庶民はドナウの川舟のような通い舟を利用します。これが荷馬車のかわりです。だから、あたりは大へん静かです。鞭の音もしなければ、人馬の騒ぎもありません」彼はさらに、仮面をつけていても、歩きつきや靴の締め金で人間を

見わたる、気のきいた、ぬけめのない走り使いの小者がいることも、ぜひ書きそえようと思った。これはきっと父親をよろこばすのにちがいない。外国の変った風習やしきたりを見聞するのが、何よりも好きなたちだから。しかし、劇場のすぐ真むかいであることを書けばいいかどうか、彼は気がまよった。ウィーンにいたころは、劇場が彼のあこがれと夢だった。十年ほどまえ、彼が十歳か十二歳のころ、仲よしの友達が二人あった。二人ともウィーデンの共同住宅に住んでいた。四号館のおなじ階だった。その倉庫がいわゆる「常打ち小屋」になっていた。彼は日ぐれどき、その友達をたずねていったことを思い出す。いろいろな背景が運ばれるのを見た異様な興奮は、いつまでも忘れることができなかった。魔法の庭の書割り。村の酒場の一部分。ランブミがき。人々のざわめき。巴旦杏菓子の売り。調律の楽器の、にぎやかな入りみだれた音。いまも思い出すだけで、胸がわくわくした。小屋の舞台は平らかではなかった。ところどころ、幕のすそに隙間ができていた。そこから、乗馬用長靴が往ったり来たりするのが見えた。コントラバスの首と楽士のあたまのあいだに、金の縫いとりをしたコバルト色の靴が、そつとのぞいたりした。婦人靴のコバルト色が、何ともいいようのない魅力だった。——幕がある、と、このコバルト色の靴をはいた女優があらわれた。ほそい靴をはいた、うつくしい女優、そのコバルト色の靴と、青と銀の縞の服がよく

似合った。彼女はお姫さまだった。つぎつぎに、危険がお姫さまに降りかかった。おそろしい魔法の森。木々の枝から声がした。猿どもがころがしてくる大きな木の実のなから、かわい子どもが飛び出して、きらきら光りながら踊った。お姫さまが歌をうたった。道化がお姫さまにからむ。しかし、ふとった道化と、うつくしいお姫さまとは、何マイルも遠くはなれた、何の關係もない人間のようにみえた。うつとりとするような舞台だった。心がうきうきして、ただ楽しかった。けれども、そと、コバルト色の靴だけが一つ、幕のすそからのぞいたときの——泣きたいような、不安なような、それでいて、うれしさに身うちがぞくぞくするような——悲しいあこがれと言ひようのないよろこびが、すどい両刃の剣のように、彼のたましいを切りさいた。その胸の痛いおもひは、忘れようにも忘れられないものだった。

アンドレアスは劇場に近いことも、不思議な縁で案内者となった紳士の服装のことも、さしずめ書かぬことに決心した。ワイシャツ一枚になるまですっかりすてしまふようなトラップ気遣いであることを書くか、それとも故意に、意識してそれだけを隠してしまふか。どちらにしても、彼はいいやだった。だから、エステルハツイのことも書くわけにはいかなかった。書けばきつと母親をよろこばすにちがいないと思ひながら。しかし、部屋代はかならず書きをえることにしよう。一カ月、二ツエヒーネだから。

それは彼の所持金からいって、決して高い部屋代ではなかった。——だが、いまさら、そんな節約が何になるといふのだらう。彼はたった一夜で、つまらぬ一度の馬鹿げた失敗から、旅費の大半を失ってしまったのだ。このことは、とうてい両親に告白する勇氣がなかった。部屋代の格安なことぐらい、何で自慢になるものか。彼は穴があればはいりたいような氣持だった。ケルンテンの不運だった三日三晩を、彼は思い出したくなかった。だが、すでに下僕の惡漢じみた顔が、容赦なく彼の目のまえに浮んできた。彼は欲すると欲しないにかかわらず、まざまざと一部始終を思い出さざるを得なかった。詳細に、事件の第一日から。毎日、かならず一度は——朝にしろ、晩にしろ、きつと思ひ出さずにいられない不愉快な記憶だった。

*

ウィラハの市の「*フンツェン*」という宿屋だった。荒くれた旅の一日を終えて、彼は早目にベッドにはいろうとした。彼が階段をあがりかけると、一人の男が下僕か従者にやとてくると、近づいてきた。従者はいらぬ、一人旅でたくさんだ、昼は自分の馬の世話をするし、夜は馬を家の人にたのめばいいから、と彼はいった。しかし、男は執拗に食いさがって離れなかった。階段を一段一段、いっしょに足をはこび、立ちあがるように正面に向きなおりながら、とうとう部屋の入口までついて来た。片足で敷居を

ふんで、アンドレアスがドアを締めようとするのさえ締めさせなかった。わかい貴族のかたが従者もつれずに旅をするのは、あんまり変りすぎている。イタリアはずいぶんそんな点は几帳面な国からだから、あなたはみすばらしい思いをするだけだろう。これでもわたしは、ほとんど半生を、わかい貴族のお伴をして外国旅行をすることに過してきた男だ。最近エドムント・フォン・ベッツェンシュタイン男爵とごいっしょだった。以前には、聖堂幹事を勤めるロドリゴ伯爵に雇われたこともあった。これらのお名前はフェルシエンゲルダの旦那も、せんごく御承知のことにはちがいない。わたしはいつても別当として市々へ先がけした。そして用意万端、手ぬかりのないように準備をした。伯爵は感にたえたように「こんなに好都合に、こんなに経済的に、旅行ができたことはない」と、おほめの言葉をくださった。しかも宿舎は、いずれも第一流のりっぱな家だったのだ。彼はフランス語は言うにおよばず、レト・ロマン語でもイタリア語でも、何不自由なくしゃべれるし、貨幣の真贋も立ちどころに見わけをつける。宿の主人や御者とのかけ引きも、絶対にひける。取らぬ。みんなが口をそろえて、「おまえさんのお連れだったなら、いくら手を出そうにも、手が出せませんや。おまえさんの旦那はまったく大船に乗ったも同然だよ」という。馬の売り買いだって玄人なみ、かえってこちらが相手に一ばい食わせる側だった。たとえむこうが手ごわい

ハンガリア人の博勞でもね。(しかし、何といつても、馬はハンガリアが一ばんだ。)まして、ドイツ人やヴァリス人の博勞では、まるきり問題にもならぬ。身のまわりのことなら、小姓、理髪師、かつら師、御者、獵師、勢子^{しやうし}がしら、鉄砲師、何でもわたしにできぬものはない。野獸^けの獵も小鳥の獵も、十分腕におぼえがある。通信や記録もできる。どんな外国語だって、読むこと書くこと、自由自在だ。通訳につかつてもらつても、きつと御満足がゆくだろう。トルコ語でいえば、ドラゴマン^(通訳やガイドのこと)です。こんな人間がおあつらえむきにフリーだというのは、奇跡といつてもいい。ベツツェンシュタイン男爵はぜひとも御舎弟のために一肌ぬげということだつたが、それはこちらから願ひげにした。わたしはわたしのひとりぎめで、フェルシエンゲルダーの若旦那のお世話がしたいのだ。むろん、日当や金の問題ではない。金銭^{かね}などは、第二、第三のことです。とにかく、初旅の青年貴族に、何とかお力になって差上げた^{さげ}いと望むばかりだ。そして、重宝がついていただけたら、そのほかにいまさら何を求めましょう。ただ一すじに願ひのは、信頼です。信頼だけがほんとうの報酬です。わたしは金なんかが目あてではない。ただ信頼と友情のために、働きたいのです。騎兵隊に入隊したときは、てんで気が合わなかつた。指揮や命令や密告が物をいうのは、ごめんだ。わたしは信頼でなくは動かない。——こんなことを立てつけに

しゃべりながら、彼は猫のように舌を出して、ぬれた厚い唇をなめた。

アンドレアスは聞きおわつていった。御親切はありがたいが、下僕はいらぬ。ヴェニスにでも着けば、そのときはまた誰かを雇うかもしれない。アンドレアスは言ひすて、ドアを締めようとした。だが、最後のひとことが余計だつた。つまらぬ見栄にすぎなかつた。彼はヴェニスで従者を雇うつもりはすこしもなかつた。むくい^{むくい}は觀面^{かんめん}だ。相手はたちまち、あやふやな語調をとらえて、すでに勝負は決定したとみたのだ。彼は強引に足をさし入れて、ドアを締めさせなかつた。何が何だかわからぬうちに、男はもう二人の騎馬旅行の用意を語りはじめていた。あたかも契約^{けいぎ}すみのことのように。今日はまた二度とない機会だ。折よく今夜、知り合ひの博勞がこの町を通る。聖堂幹事のときから知り合ひになつた博勞だ。煮ても焼いても食えぬトルコ人ではない。彼の持ち馬のハンガリア馬が、ちようどおあつらえむきと言つていい。あの馬にまがれば、一週間といわず、りつぱに速歩がでましよう。他人には九十グルデンでも安いくらいの栗毛だ、ほかならぬ自分には、七十グルデン以上は言わぬはずだ。それというのも、聖堂幹事のために斡旋^{かんせん}した大きな取引があるからだ。とにかく、今夜の十二時まで、何とかして購入をすまさせねばならぬ。博勞はおそろしく朝の早い男だ。さあ、腹巻のお金をさっそくおわたしてください。それとも、ひと走り

階下へいって、旅行用かばんか馬の鞍を取つてきましようか。お金は一財産、ドッカーテン金貨で、鞍のなかに縫ひこまれていますね。身分のあるお方は、当座の必要しか身につけていないのですよ。

男は金^{かね}の話をもちだしたとき、ひどくいやみな顔つきをした。青いしょぼしょぼの目をした、汚ない、ずるそうな目じり。そのそばかすだらけの皮膚に、小さなしわがさざ波のようにゆれた。男はアンドレアスの傍に身をよせてきた。への字にむすんだ、つばだらけの、厚い唇から、火酒のにおいがした。アンドレアスは男を敷居のそとへ押し出した。男は初めて、わかい貴族が案外力があるのを感じたらしく、何もないわなかつた。しかし、そこでアンドレアスはまた一言、不要な言葉をそえてしまつた。あつたしの奴^{やつたし}とはいへ、あまり乱暴に取りあつたのが、すこしばかりはしたくない気がしたのだ。ロロン伯爵^{ロロン}だつたら、いきなりこんな手荒なまねはしないだろう、とアンドレアスは、ふとそんな考えがあたまのなかをひらめいた。彼は「さよなら」をいうつもりで、今日はひどく疲れてしまつた、あすの朝、またあらためて話を聞こう、とにかく、ここところは何も無いことにして、このまま引きとつてほしい、といったのだつた。

朝はやく、そのまま出発すればいい、とアンドレアスは考えた。しかし彼は、われとわが^{われとわが}にかかつてしまつたのを知らなかつた。翌朝、

あたりが薄暗く、まだ彼が目をさまさぬうちに、相手はもうドアのまえに立っていた。男は報告した。旦那は五グルデンも上げたのです。博労は六十五グルデンで馬を手ばなしました。栗毛はもう下の庭につながれています。もしヴェニスに着いて馬をお売りになるとき、六十五グルデンから一グルデンでも損をなされば、御遠慮なく、どうぞわたしにの給料から差し引いてください、と。

アンドレアスは寝ぼけた眼で、庭につながれている、やせた、しかし元氣そうな馬を、窓から見おろした。従者をつれて知らぬ市へはいり、そして宿舎の門をくぐる——たしかにわるい氣はしないだろう、と一種の虚栄心がアンドレアスの心をうごかした。べつに大した金でもない。一グルデンでも馬で損をする氣づかいはないのだ。猪首の、そばかすだらけの男は、存外しっかりした、氣のきく、若者らしい。ベツェンシュタイン男爵やロドロン伯爵の話がほんとうなら、ただ手あたりまかせの素姓も知れぬ男の言いなりになったのとはちがうだろう。アンドレアスは高名な貴族に対する無限の尊敬を、シュビーゲルガッセの両親の家のウィーン風な空氣とともに、子どものときから胸いっぱい吸っていた。大貴族の生活や行爲は、彼にとつて祈禱書のアーメンとおなじことだった。

とうとうアンドレアスは、下僕をつれて旅行をすることになってしまった。男は馬に乗って主人のあとに従った。アンドレアスが一言もい

わぬさきに、旅行かばんは自分の馬につけていた。第一日は何ことも起らなかった。しかし、思い出すと、いやな、つまらぬ一日だった。ふたたび過去の日をたどるのは、心がすまない。だが、欲すると欲しないにかかわらず、どうなるものでもなかった。彼がいくら思い出すまいとしても、つい思い出されてしまうのだ。

アンドレアスはシュビートルを越えて、チロルを通つてゆこうと考えていた。しかし、あたらしい下僕は左へまがることを主張した。ケルテンの道をどこまでもゆこうというのだ。道路はいいし、宿たつてどこもほかに比べものがない。チロルの人間とはすっかりちがつた、田舎のおもしろさがある。ケルテンの宿屋のむすめや水車屋の女は、どれもこれもすばらしい。ドイツ中で、あんなに引きしまった、あんなにまるまっちい女の胸が、どこにあるだろう。それは「ことわざ」になっているばかりか、唄にさえ歌われている。フェルシエンゲルダーの旦那だつて、きつとその唄の一つや二つは御存じにちがいない。

アンドレアスは黙っていた。身体が突然、あつくなつたり寒くなつたりした。あとからついてくる男は、たいして年上ではなかった。ちがつても、せいぜい五つとはちがわぬはずだ。アンドレアスは、指一本さわつたことがない。まして女の肉体に、指一本さわつたこともないと知つたら、この男は何というだろう。輕蔑したようなひどいことを、平氣でいうかもしれぬ。

アンドレアスはいくら男の言葉を想像しようとしても、想像がつかなかった。しかし彼は、そんなことで輕蔑されたら、そのままにはしておけぬと思つた。きつと男を馬から引きずりおろして、打擲するにちがいない。アンドレアスは一度に血がのぼつて、目がくらくらした。

二人は黙々として、広い谷間をすすんだ。雨もよいの空だった。右にも左にも、山腹の草地がつづき、ところどころに農家や枯草置場がみえた。見あげる尾根には森があり、どんよりと雲がかかつていた。昼食をすまずと、ゴットヒルフはふたたび口をききはじめた。旦那はさっきのお神さんをよくごらんになりましたか。きょう日はかくべつ大したこともないが、一七六九年、というところと九十年まえですが、自分が十六歳のとき、あの女とは毎晩のように会つたのです。およそそれが一カ月もつづいた。なかなかいい女だった。黒いふさふさした髪の毛が膝までもどいていた。ゴットヒルフはそいういながら馬を寄せて、急にアンドレアスに近づいた。アンドレアスは、馬に擦りきずをさせぬように氣をつけれ、こちらの赤毛がいやがるじやないか、と叱りつけた。しかし、平氣でゴットヒルフは話をつづけた。結局、わが身から出た婿とはいえ、女は手いたいしつべい返しを食つて、ぐうの音も出なかったのだ。当時、彼は伯爵家の小間使で奇麗な小むすめとも、ちょっとした關係があつた。女は何となくそれを感じつけてしまった。ひどく嫉妬にかられて、や

まい犬のようにやせこけ、目をくぼませていた。彼はポルツィア伯爵の狩猟係だった。それが生れて初めての奉公だ。伯爵が十六歳のゴットヒルフを狩猟係に取りたてたばかりか、お付きの一人に抜擢したことは、人々をおどろかせた。

噂はケルンテン中にひろまった。しかし伯爵には、伯爵の考えがあつてしたことだ。伯爵は秘密をまかせてよい人間とわける人間を知っていた。何よりも口のかたいことが必要だった。なぜなら、伯爵にはいろいろの隠れた情事があつた。口のなかの歯のかずよりも、伯爵の女のかずが多かつたかもしれぬ。ひそかに伯爵の死をねがう世間の良人も、決して三人や四人にはとどまらなかつた。伯爵を怨むものは、上流階級の男のみならず、百姓や水車屋や猟師にも及んでいた。伯爵にはそのころ、わかいポルムベルク伯爵夫人という愛人があつた。女狐のように、夫人はすっかり伯爵に有頂天だった。スロヴァニア生れのブロードの小間使も、それに劣らぬくらい、彼に首ったけといつてよかつた。ポルムベルク伯爵家で「巻狩り」のもよおしがあつたとき、夫人は大胆にもこっそりとポルツィア伯爵の「持ち場」へ忍んできた。女だてらに、四つんばいだった。伯爵は彼の手に銃をわたした。うまく人々の注意をそらすように、身代りになつて撃て、といった。彼は伯爵におとらぬ腕まえた。真相は誰にも気づかせなかつた。一度、彼は鹿打弾をこめて、大きな奴をねらつて撃つた。およそ四十歩ほど離れた稚木のなか

だった。彼はおぼろな光のなかの獲物の肩先をねらつたつもりだった。白い火薬のけむりのなかで、獣が倒れた。しかし、同時に、下ばえのなから、するどい悲鳴が聞えた。女の声だった。悲鳴は一声だけで、すぐもの静けさに返つた。負傷した女は、自分の手で口をおさえたのかもしれない。むろん、彼は「持ち場」から一歩も動くことはできないのだ。翌日の夜になつて、彼はお神さんをたずねた。ひどい熱に苦しみながら、女はベッドの上に寝ていた。彼はすばやく、すべてを読みとつてしまった。女は嫉妬から、無理に森へ出かけた。彼が小間使と、下ばえのなかで「みそかごと」に耽つていると考へたのにちがいない。——彼は腹をかかえて大笑いをした。女はまんまと自分でしつぺい返しを食つたのだ。しかも、女の口からは一言半句の怨みごとということができる。ただ黙つて、つらい侮辱を忍ぶだけだ。女は誰に申しひらきのしようもない。いや世間に対しては、うっかり鎌の上におれて大けがをしたなど、まっ赤な嘘をいわねばならなかつた。

アンドレアスは馬の足を早めた。下僕も彼のあとを追つた。アンドレアスの後につづく赤らんだ男の顔は、さかりのついた狐のように、野性の、むき出しの欲望そのものだった。アンドレアスは、その伯爵夫人はまだ生きてゐるのかと聞いた。その後も、彼女は多くの男に幸福をあたえた。いまでも二十五歳の女のようにみずみずしい。伯爵夫人については、まだまだ面白

い話がある。とにかく、この土地の「屋形」の夫人は、ほどよく持ちかけさえすれば、どうにでもなるのだ。百姓女がそつと小指を出すすれれば、夫人は大胆に男に腕をまかす。いや、腕以外のものだって惜しみはしない。ゴットヒルフは図々しく、ふたたび馬をならべた。アンドレアスとはや咎めなかつた。いやな蜘蛛のように、身体の皮膚までもむずむずする不愉快な奴だと思つた。しかし、彼の無遠慮なおしやべりが二十二歳のわかい血をわき立たせた。アンドレアスは何を考へているのか、自分でわからなかつた。今夜、彼はポルムベルクの城に着く。彼は好意でむかえられる。ほかに大ぜいの客人たちがいる。夜猟に出かける。彼の射撃は第一等だった。ねえ、かならず獲物をしとめた。うつくしい伯爵夫人が、「持ち場」の彼をそばへ来る。夫人のきらきらした目が、じつと見つめた彼の目にたわむれる。あたかも彼の銃口が森のけもの生命をもてあそぶかのように……ふと、気がつくと、彼は夫人と二人きりだった。しんとした部屋。厚い壁。死んだやうに、何の物音もない。そして、彼は二人きりだった。いや、いつのまにか、女はもう伯爵夫人ではなかつた。彼自身も不思議なことに、もはや青年貴族ではない。優雅、気品、美しさ、そんなものの欠けらもなく、ただむき出しの男と女だった。暗やみのなかのあらあらしい行為と殺人にすぎなかつた。ゴットヒルフも傍にいた。バジマサがたでそつと忍んでくる女を、ゴッ

トヒルフが大きな口をあけて銃口でねらっている。彼はおそろしかった。伯爵夫人と、にぎやかな、明るい食堂へ引きかえしたいと思った。そこには、ふたたび優雅で上品と気高さがあるにちがいない……と、彼は夢から覚めるように、我にかえった。彼は思はず馬をとめた。同時に、ゴットヒルフの馬がつまずいた。「畜生め！」と、ゴットヒルフが舌打ちした。もはや主人に仕える小者ではなく、不断からいっしょに豚飼いをした仲間同志のような無礼な言葉だった。アンドレアスは、しかし、一言もたしなめなかった。彼は心身ともに、くたくただった。広い谷間がどこまでもつづいていて、雨雲はよくれた袋のように動かない。不意にアンドレアスは、眼前の事実がすべて古い過去になり、自分もかなり齢をとり、子どもを持ち、馬にまたがってヴェニスへゆくのが自分の息子だったら、と空想した。息子は自分とは似ても似つかぬ、わかかしい立派な青年だ。谷間の風景もさわやかさと清らかさにあふれている。教会の鐘の音がとおくからひびく日曜日の朝のように……。

翌日、道は峠にかかった。谷間がせまくなった。けわしい山腹の斜面がつづく。高みの断崖には、ときどき教会がみえ、まばらな農家がみえた。脚下から溪流のせせらぎが聞えた。雲がしずかに流れた。日光がふと一すじの矢のように射して、谷底の川を照らした。川やなぎとはしばみの木のあいだに、石が白くひかり、川の水は透明なみどりをたたえていた。突然あたり

が暗くなつて、しぐれてきた。朝からまだ百歩とあるかぬうちに、買ったばかりの栗毛が、すっかり元気を失っていた。どんより目がくもり、急に老けた顔つきになり、どう見ても昨日の栗毛とはみえなかつた。ゴットヒルフは不敵なつらだましいでいった。日ぐれには、馬だつて足を疲らせている。だのに、薄暗がりの道で、何のわけもなくいきなり馬をとめる人がいるんだから、後につづく馬だつて足をつまずかせますよ。べつに不思議でも何でもない。こんな馬鹿な目は、まだ一度もみたことがない。もし騎兵隊だつたら、寄つてたかつて、がんじがらめの簀巻きの刑罰にせられるところだ。

アンドレアスは何もいわなかつた。彼は馬のことは玄人だ。栗毛の責任を自分ひとりで背負っているつもりだろう。むしろくしゃするののも無理はない——アンドレアスはそう考えた。——しかし、ベツツェンシュタイン男爵にむかつて、まさかこんな調子を出ないのにちがいない。いわば、これも自業自得だ。ほんとうの貴族には、何か言葉ではいえない気高さがある。一介の下僕だつて、自然にあたまのさがるものがある。それが残念ながら、自分にはないのかもしれない。無理にたしなめたところで、いつそうおかしいものだろう。とにかく土曜日までは我慢するとして、たとえ半金は失つても馬を売り、きれいに給料も払つて、別れるのだ。あんな機敏な男なら、大してあぶれることもあるまい。どんな役目でも、造作なくつとまるのだから。いずれ

にせよ、若僧の手におえる人物ではなかつたのだ。

やがて二人は、なみ足で馬をすすめねばならなくなつた。栗毛はすっかり衰えて、急にやせてしまつた。ゴットヒルフは、はれぼったいような、怒つたような顔つきだつた。彼は行く手の大きなひと構えの農家を指さした。農家は国道から、すこしばかりそれていた。あの屋敷へ馬をつなぎましょう、栗毛はもう一歩もうごきません、と彼はいった。

農家はすいぶんりっぱだつた。正方形に石塀をめぐらし、四つの隅には頑丈な櫓がそびえていた。入口の門には石をはめこんで、紋章がぎざまざっていた。アンドレアスは豪農の家にちがいないと思つた。二人は馬をおろした。ゴットヒルフは二頭の馬を受けとつた。門をはいるとき、すでに栗毛は歩かすよりも引きずられてゆくとしか見えなかつた。前庭には人かげがなく、ただ一羽のみごとな雄鶏が多くの雌鶏をつれて、堆肥の上であそんでいた。むこうには泉から綺麗な水がわき、石塀をくぐろうとして、いら草や黒いちごのなかをながれた。あひるがいた。ちいさな礼拝堂があつた。礼拝堂のまわりも後、木の格子垣をめぐらした花壇になつていた。これらすべてが石塀のなかなのだ。前庭をつらぬく中央の道には、石が敷かれていた。馬の蹄ががちちと敷石をひびかせた。母屋を通りぬける大きなアーチ形の門道がみえた。馬小屋は

母屋の裏手にあるらしかった。

召使が二人、出てきた。わかい女中が一人すがたをあらわした。それから、主人が迎えに出た。せいの高い、見たところ四十歳を越したばかりの、ほっそりとした男で、上品な顔立ちをしていた。馬をつなぐ小屋やアンドレアスのために二階の小奇麗な部屋などを指図した。不意に客人をむかえても、べつに迷惑そうではなかった。すべてが物持ちの家の「仕さたり」だったのだ。主人は栗毛をちらと見ると、近よって、前足のあいだをのぞくように馬の下腹をしらべたりした。二人の客はすぐ昼食に来るよう招待された。

食堂はひろびろとした、円天井の部屋だった。壁には大きな十字架のキリスト像の彫刻があった。一方の隅に食卓があり、すでに食事がはこばれて、召使や女中たちはもうスプーンを手にと取っていた。上手に女主人とむすめがすわった。女主人は大がらな女だった。角ばった顔つきで、主人のような美しさと愛敬はみえなかった。むすめはほとんど母親とおなじ背たけだった。しかし、まだ子どもどもとした感じを残していた。顔はよく母親に似ていたけれども、ふと何かの表情がうごく、父親をつくりの愛敬がばったかがやくように湧きだした。

食事がはじまった。アンドレアスはこの日の屋食を思いだすたびに、無気味なものを目をつぶって呑みこまねばならぬような、喉のつまる思いがした。すこしも疑いを知らぬ、善良な人

人だった。尊敬すべき、りっぱな人々だった。

食前の祈りは、敬虔な態度で、主人がした。女主人は見知らぬ客を息子のようにもてなした。召使や女中たちも控え目で、変な人見知りがなく、たがいに率直に親しみをあらわしていた。しかし、そのなかにまじったゴットヒルフは、ただひとり、やわらかな草のなかの雄山羊だった。自分の主人にむかつてさへも、不敵な高慢な様子であらためぬし、召使や女中には卑猥きわまる無礼な態度をみせた。あつかましく割りこむ、ふざけ散らす、鼻をうごめかす——アンドレアスはまったく気がでない思いを我慢した。傍若無人のふるまいや不遜な笑いや得意げな下卑た冗談などが、アンドレアスの心を切りさいなんだ。アンドレアスの気持は、そのまま一人一人の召使の、この家の主人の、女主人の、気持だったにちがいない。彼は主人のひたいが白けたような気がした。女主人の顔つきもいっそう堅くひきしまったようだ。アンドレアスは起ってゴットヒルフをたしなめようと思った。思いきり顔をなぐりつけてやる。相手が血だらけになって倒れる。みんなが外へかつぎ出す。両足をかかえて……。

やがて食事が終わった。神への感謝がすんだ。アンドレアスは下僕に、すぐ馬小屋へいって病気の馬をみることを命じた。いや、そのまえに旅行かばんと行囊を部屋へはこんでおけ、といった。彼の声はきびしく、するどかった。ゴットヒルフはびっくりしてアンドレアスの顔を見

た。不服そうに口をゆがめ、にらむような目つきをしながら、いやいや部屋を出ていった。アンドレアスは二階の部屋へかえった。一度馬をみに下りてゆこうとしたが、途中でまた思いとどまった。ゴットヒルフの顔を見るのがいやだったのだ。彼はアーチ形の門道のところに立っていた。すると、寄せかけたドアが開いて、ロマーナが出てきた。どこへゆくのか、と彼にきいた。どこへゆく当てもない。ただ時間つぶしに、こうしてぼんやり立っているだけ。一度は馬もみなければならぬだろう。あす、出立ができるかどうか。そう彼がこたえようと、ロマーナはいった。「時間つぶしですって？ わたしは時間がたつのが早すぎるくらいだわ。ぼんやりなんか、してられない気がするわ」むすめはさらに言葉をつづけた。——もう村をまわりしただろうか。教会がうつくしい。教会へ彼を案内したい。帰ってから馬の様子をみればいい。そのあいだに、馬丁が魔法をほどこすだろう。馬によく効くという牛の糞の魔法を。

二人は連れだって庭の裏からそとへ出た。牛小屋と石塀のあいだを通ると、隅櫓のそばに小門があって、野外に道がつづいていた。ゆるやかな上りになった牧場の小道をゆきながら、二人は話をした。両親が生きているか、兄弟はあるか、とロマーナがたずねた。——そうなの、あなたはたつたひとりきりなの。一人の兄弟もない。お気の毒ね、と、彼女はいった。ロマーナには二人の兄弟がある。初めは九人だった。